

令和 3 年 6 月 10 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K02188

研究課題名(和文) 合意形成および社会形成の基盤理論としての完全論

研究課題名(英文) Perfectionism, Basic Principle for Decision-Making and Social-Shaping

研究代表者

中野 泰治 (Nakano, Yasuharu)

同志社大学・神学部・准教授

研究者番号：80631895

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：クエーカーの合意形成は、多数決や議論の力強さといったものによらず、最後まで異質な意見に意見を耳を傾け、最終一致に至るまで話し合いを続けることから成っており、約370年に亘り一貫してその伝統を守り続けている。彼らの合意形成・組織形成の前提となる考えとして、(1)神は矛盾ではなく、一致を作り出す方との信念、(2)すべての人は、部分的にしる、それぞれ神の語りかけを受けているため、話し合いへの参加を通して、歪んだ見解が矯正され、共同理解に至りうるという考え、(3)敵対者への愛というイエスの模範に従い、最後まで異質な意見に関われること(完全)を重視すること、という三点が存在することを歴史的に明確化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の会議の場では往々にして、参加者の意見の表明や話し合いが行われるのではなく、すでに周到に用意された議事に賛否を表明することに終始することが多い。そうした場では、話し合いの中から新しい視点や洞察を得ることが目的ではなく、如何に決定された事柄に対して合意を導くことに力点が置かれる。英米の民主主義の源流の一つとしてA. D. リンゼイによって参照されるクエーカーの合議形式・組織形成のあり方について改めて鑑みることで、英米の民主制度をモデルとして構成された日本の民主制の問題点と可能性について考慮することが可能になるだろう。

研究成果の概要(英文)：The decision-making based on Quaker model, which has been traditionally uphold for more than 370 years, is done, not by majority rule or the power of arguments, but by expressing each voice and opening themselves to different opinions to the last, so that their discussions would lead to unity in a group. What this historical research of the principle of Quakers' decision-making and social-shaping shows that there are three fundamental religious premises: (1)their faith in God, who makes no confusions but unity, (2)God's revelation is given to every one partly, and so their open discussions among them helps avoid the cognitive distortions of each, and then helps reach the unity (common understanding), (3)according to the Jesus's model of "love one's enemy"(perfection), each person in a discussion group try to open themselves to different opinions to the last before the common understanding is build up.

研究分野：クエーカー研究

キーワード：クエーカー 合意形成 合議形式 組織論 敵対者への愛 完全論 熟議民主主義

1．研究開発当初の背景

現代の政治においては、世界の至るところで、民主主義の不全が叫ばれている。そうした民主制度の不全に対して、政治学からは議論や討議の重要性を説く熟議民主主義・討議民主主義の重要性が説かれ、また社会学からは合意形成に関するさまざまな理論が提起されているが、それぞれの研究は現在も途上の段階にある。本研究は、イギリスの政治学者である A. D. リンゼイが民主主義の源流の一つと見なすクエーカー（フレンド派）の業務集会のあり方について、つまり彼らの合議形式（物事の決定の仕方）・社会形式（組織形成の仕方）のあり方を、キリスト教の概念である「完全（具体的には、隣人愛、もしくは敵対者への愛をこの世において徹底して実践すること）」を軸にして把握し、また同時に業務集会の議事録を分析することで彼らの合議の実際について分析し、改めて彼らの理論および実践を民主主義理論の中に位置づけ、現代の民主制においてどのように活用可能かについて、神学、歴史学および社会学的視点から考察したいと考えた。

2．研究の目的

本研究は、合意形成および社会形成の基盤理論としてのクエーカーの完全論に考察し、彼ら独自の合議形式がどのように形成され、英米および日本の民主主義においてどう位置づけられ、またそれが合議に関する新しい視座を提供しうるものかどうかについて明らかにすることを目的とする。初期クエーカーの完全論は、単なる道徳的範疇を超え、合意形成・社会形成を巡る理論に発展した。（１）この発展に関して、クエーカー指導者の著作を分析することで理論的に把握し、（２）完全論が合意・社会形成の基盤として現実の集会においてどう実践されていたのかを調査し、実際的な完全論を捉える。（３）英米の民主主義においてどのようにクエーカーの合議形式が適用されうるか、また英米の制度をひな形とする日本の民主主義に対して適応可能かを考察する。

3．研究の方法

クエーカーの合議形式は、クエーカーの創設（17世紀半ばの共和制期）とほぼ同じ時期に定められたものであり、それ以来その形式は約370年に亘り守られ続けており、すべての業務集会に関して議事録が残されている。本研究においては、（１）まず合議形式の基礎・基盤を作り上げた初期クエーカー指導者たちの著作を分析することで、彼らの合議・社会形成に関する考え方を理論的に把握し、（２）クエーカーの研究機関（英国の Woodbrooke Quaker Study Centre や、米国のクエーカー系大学の図書館など）に残されている議事録を分析することで、（さらにクエーカーの業務集会に参加して）クエーカーの合議形式の実際について把握する。そして、（３）それを英米の民主主義の歴史の中に位置づけ、英米の民主主義をひな形とする日本の民主制への応用可能性について考察する。

4 . 研究成果

本研究で明らかになったことは、(1)クエーカーの合議形式や組織論は、敵対者への愛の徹底的な実践(完全:聖化(実際に正しい存在になること)の完成)に理論的にも実際的にも基礎付けられていること、(2)クエーカーの伝統は、18世紀初頭にヒックス派[後の自由主義クエーカー]、正統派[後の福音派クエーカー]、そして保守派に分かれたが、20世紀来の自由主義クエーカーでは、(1)で見られるような伝統的なあり方とは全く異なるあり方で合意形成および組織形成が行われるようになったことである。

伝統的なクエーカーの信仰では、自己の無化(沈黙)において、内なる光(神からの働きかけ)に従うことで義とされ、聖化されるという。最初期のクエーカー信仰では、共和制期当時の思想潮流としての切迫した終末論を背景に、時の完成と人の完成(聖化の完成)が即時的に実現すると信じられていたが、終末論が減退した王政復古期以降のクエーカーの完全論は、時間をかけて達成されるものになった。この修正された完全論(つまり、敵対者や異質なものへの愛)がクエーカーの合意形成や教会論(組織論)の中核となっている。合意形成においては、それぞれ異なる賜物(性質)を持ったもの同士の愛の関係が強調され、合議において最後の最後まで異質な意見に対して開かれることが重要視される。

こうした完全論に基づく合意形成および組織論は、新ヘーゲル主義の影響下に形成された20世紀来の自由主義クエーカー思想では全く性質の異なるものとなった。内なる光は、「外から内へ働きかける他性」ではなく、自己の理性や意志や意識の働きと見なされるようになった。そしてクエーカーは、世俗の組織論であるU理論などの合意形成・組織形成論の影響を受けて、他者との対話、他者との関係構築を相互関係的なものではなく、自己の成長(自己実現)に基づくものと見なすようになった。すなわち、現代クエーカーの合意形成および組織形成は、自己による計算可能な領域で行われるものとなった。

こうして変化した合意形成・社会形成論は、世俗化した社会において、また信仰的・思想的背景の異なるもの同士の対話理論として役に立つ面も持っているが、宗教的側面が捨象されたため、聖霊の働きかけ、神の働きかけ(人間の理性では計算不可能の領域)への配慮がなくなってしまう。そのため、目に見える領域における単なる利害調整の理論に陥った感がある。こうした研究成果を受けて、民主制への応用可能性という点において現段階で言うことは、クエーカーの合議における三つの要点、つまり(a)神は争いを生み出す方ではなく、一致を生み出す方という信念の必要性(一致点は必ず存在するという信念)、(b)すべての人はそれぞれ神からの賜物(才能や見解)を与えられており、皆との対話をとおして共通理解(sense of the meeting「集いの意識」)を作り上げることが可能であるという信念の必要性、(c)どのような異質な意見(自己にとって異質な領域)に対しても最後まで開かれ、耳を傾ける必要性(完全)、これらの三つの要素が政治の基礎段階における対

話・討議理論として有用であると考え。しかし、最終年度はコロナ渦により研究に遅れが生じたため、英米の民主制度における歴史的な位置づけについては十分な検討をすることが出来なかった。この点については、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 中野泰治	4. 巻 81-2
2. 論文標題 18世紀クエーカー思想の特質について 聖性の追求	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 基督教研究	6. 最初と最後の頁 21-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中野泰治	4. 巻 13
2. 論文標題 〔報告書〕ジョージ・ホワイトヘッドの正統派神学について 静寂主義の原因を巡って	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ビューリタニズム研究	6. 最初と最後の頁 67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中野泰治	4. 巻 80-1
2. 論文標題 ジョージ・ホワイトヘッドの正統派神学と静寂主義の関係 Robynne Rogers Healeyの議論を巡って	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 基督教研究	6. 最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中野泰治	4. 巻 79-1
2. 論文標題 王政復古期クエーカーの教会論に関する理論的分析 パークレー神学を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 基督教研究	6. 最初と最後の頁 21-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中野泰治	4. 巻 5月号
2. 論文標題 クエーカーの sacrament 論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 32-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasuharu Nakano	4. 巻 22-1
2. 論文標題 Nitobe and Uchiyama Schools of Thought and Post-War Democratic Education: A Fault in the Personality Development Education	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Quaker Studies	6. 最初と最後の頁 85-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 中野泰治	4. 巻 83-1
2. 論文標題 合意形成および組織形成の基盤理論としての完全論 自由主義クエーカー思想の諸類型と合意形成論・組織論の問題点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 基督教研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 中野泰治
2. 発表標題 クエーカー入門
3. 学会等名 普連土学園教職員研修会第一部 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中野泰治
2. 発表標題 クエーカーの現在
3. 学会等名 普連土学園教職員研修会第二部（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中野泰治
2. 発表標題 ジョージ・ホワイトヘッドの正統派神学について 静寂主義の原因を巡って 」
3. 学会等名 日本ピューリタニズム学会関西研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中野泰治
2. 発表標題 新渡戸・内村の門下生と戦後民主主義教育 個人化・人格教育の隘路
3. 学会等名 日本基督教団関西同信伝道会講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 中野泰治〔翻訳〕	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新教出版社	5. 総ページ数 221
3. 書名 クエーカー入門	

1. 著者名 中野泰治 [共著]	4. 発行年 2017年
2. 出版社 新教出版社	5. 総ページ数 323
3. 書名 宗教改革と現代 改革者たちの500年とこれから	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
英国	The University of Birmingham	Woodbrooke Quaker Study Centre	